
桜草

元樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜草

【Zマーク】

Z5065C

【作者名】

元樹

【あらすじ】

主人公の田村真司はなにも変化もない学校生活を送っていました。ある日どこか懐かしさを感じるそんな女の子が転校をしてきて、そして昔止まつた歯車がゆっくりと動き始める

第一章　はじまり

それは大体春の陽気に溢れている4月の末ごろだった。

「さつちゃんきょうはぼくをあきちによんてどうしたの？」

あの頃の自分は幼かつたためそこにあつた悲しい雰囲気に気づかず何か楽しい事や何かを発見したんだと思い、ただ純粹に聞いていた。

今思うとすごく残酷なことを聞いていたんだと思ってくる。

彼女は俺にそう聞かれるとても泣きそうな顔をして、

「しんくんにさよならをいいたくてよんだんだよ」

そういうと涙を流しながら悲しげに微笑んでいた。

ギリリリリン　ギリリン

パツチ

俺はまだ眠たかっただが目覚まし時計がうるさい、頭が覚醒してしまつた。

「ん・・・・もう朝か・・・まだねむたいな・・・それにしても懐かしい夢見たな・・・

覚醒は微妙にはしたのだがまだ少しぼーっとしていると窓の外から近所迷惑になりそうな大きい声が聞こえた。

「おい、起きているか！」

「はいはい起きているからそんな近所迷惑な大きさで俺の名前呼ばはないでくれ」

俺は言いながらドアの前にいるそいつを睨んだが全く氣にもしてない。
「それならさつまと着替えて降りて来てくれんか？あまりわしを待たせるな」

そいつはさつきと比べて声の大きさをさげてはいたが、自分勝手な事を言つていったため俺の気は晴れなかつた。

そいつは相良 健一といい、なんか知らないが高校一年のころにちよつとしたことがあつて、友人となつてから家が近くもないのに学校がある日は毎回毎回起こしていく。

俺的には凄く男に迎えに来るのは微妙な気分だがな……

だがやはりそれでも人を待たせるのは凄く抵抗があるため、特技の早着替えを活用してちゃつちゃつと行く準備を整えた。

着替え終わつて、部屋を出て、駆け足で居間に向かい、両親が海外にいるため、いつものように前日にスーパーで買って用意しておいて居間のテーブルの上に置いておいた昼飯セット（パン二つとペットボトルのお茶）を鞄の中に詰め込み、家を出た。

出てすぐ待つっていたのは「おそい・・」という健一の非難めいた言葉だった。

かなり頑張つて急いだのにその言葉はあんまりなんだが・・・・・俺が拗ねたのを気づいて少し反省したのか苦笑いを浮かべたがすぐまじめな顔になると

「まあいいが・・・・と話している場合ぢやない。早く行く

健一は少し焦り気味に言つた。

あれ・・部屋の時計を見たときにはまだ三十分も時間あつたはずだがな・・・・と思しながらもかなり嫌な予感をしたため、ポケットの中に入つていた携帯で時間を確認して、俺は固まつた。

まあ健一がすぐ俺の頭をこついたため、すぐ戻されたが……

「なあ……?これは何かの間違えか?」

俺はもの凄くすがりたい気分で問い合わせたが、

「真司、現実、間違いなく走らないと遅刻する

と返され、必死に走ることが決定的になり、俺たちは急いで学校に向かうべく走り出した。

「うおおおおおお!」

俺達が住む時雨町自体坂が多い土地柄で、俺達の通う睡蓮高校は俺の家から歩いて二〇分だがその坂で最も急坂の上にあるため、こうやって叫びながらじやないと走る気もしないほど道のりだ。

俺の少し前を健二があまり疲れない様子で走っていて

「なにへばりかけているんだ？」

と余裕がまだあるようで俺に普通に声かけてくる始末。

「お前ほど運動神経がないんだ！お前はバケモノか！」

というわけで悔しいのでバテながら頑張つて言い返したりもしているが、健二はただ涼しげな顔をして走つていつて効果無し。

健二運動神経良すぎだし頭もいいし、こいつは本当に化け物なのかもしれない…と自分のこの疲労具合と健二の疲労具合の違いについて最もらしい言い訳を、頭の中でしつつ、走つていると坂に終わりが見えてきて、俺たちの通う高校の校門が見えてきたので、俺は最後の力を振り絞りいつも要領で、校門を通り過ぎ、下駄箱まで素早く行き上履きに履き替えると教室のある3階まで階段を一段飛ばしながら登り廊下を走り抜け時間までにドアを開けることに成功した。

「ぜえぜえ・ま・に・・・あつ・・・た・・・」

やつぱり息のあがった状態だと声を上手く出せずに肩で息をしていると少しどアの近くの席に座っていた女子がこっちを向いてすこし微笑みながら

「真司今日はめずらしく遅刻ぎりぎりだったね。はいはい息を整えて。」

こっちに向かつて歩いてきてドアを開いたまま止まっていた俺を教室の中まで引っ張りこんだ後、その女子が俺の軽く背中をさすってくれているときに俺が入ってきたドアから一矢一矢としながら健二が登場して、俺達の横を通り過ぎると

「いつもながら仲がいいな『両人』

俺をさすつていった女人の前に立ち、その一矢一矢した顔を向けて言った。

向けられていた方の女の子は健一を少し眉間にしわを寄せて睨みつけるような目で見つめ

「そんなんじやない！馬鹿健一のくせに変なこと言いつな！」

「こんな純粋無垢の男に向かってなにを言うんだ？」

健一がすぐそんなことを言つと彼女は疲れたようにため息をつき

「それすごく嘘っぽいよ？」

とすごく疲れた感じで言つた。

俺はそのやりとりをその女子の横で少し笑いながら見ていうという傍観者の立場に立つという一番安全な立場に立つていた。
この女子は西原 葵^{にしはら あおい}といい、高校一年生の頃にある出来事がきっかけで仲良くなり、友人となつた。

毎回一人を見て思うんだが俺の友人の二人は両方とも顔立ちがきれいに整つており、健一は身長も高く顔はシャープな感じで葵はどこぞのアイドルのように顔で非の打ち所のない美人であるため二人ともそれぞれの一年の頃の出来事無ければ友人になることも無かつたと考え事をしていると

「ねえ真司っぽうとしてどうしたの？」

といつまにか会話が終わっていたのか、葵が俺の顔を近くで覗きこみながら、心配そうに言つた。

「ああすこし考え方をね ほらもうすぐチャイムが鳴るから…」

少し恥ずかしくなつたため誤魔化して会話を変えようとしたがタイミング良くチャイムが鳴り、葵は元の自分の席にしぶしぶ戻つていつた。

その様子いつの間にか自分の席に座つていた健一が微笑みながら見ていたのを気づいて、さつきよりもなぜか恥ずかしくなつて俺も急いで教室の一番後ろの窓際にある自分の席に座つた。
俺が座つたと同時に男の担任が教室に入ってきた。

「全員あるか？遅刻者はおらんな？」

とバンバン教卓を出席簿で叩いて騒がしかつたクラスを静かにさせようとしたため騒がしかつたクラスの中が少しずつ静かになつてい

つた。

それに満足したのか。小さく何度も頷き話を再開した。

「（）で出席を取りたいがその前にやらないといけないことがある。
ほら入ってきなさい」

担任の言葉にせっかく静かになつたクラスがまた騒がしくなつた。
だが健一だけは事前に知っていたのか知らないがただニヤッと笑い
ながらドアの辺を見つめるだけだつた。

そう周りを見ていると

「じゃあ入ってきなさい」

とこう担任の声でドアがゆっくりと開く音がしたのですぐさまそつ
ちに田田を向けた。

そして綺麗な女子が軽く頭を下げて教室に入つてきて、担任の横に
立つとクラスは静まつた。

その女子は、髪は背中にかかるくらい長く顔は葵と比べてもほとん
ど差ないくらい整つており、背は低めの身長をしていた。

「ほり自己紹介をしましたまえ」

と担任に急かされると緊張氣味に、

「今日から2 Bのみなさんと勉学と一緒にさせて貰います。近藤

早耶です。どうぞよろしくお願ひします」

とまた深々と礼をすると同時に静まつていたクラスが勢いよく盛り
上がつた。

特に男子が特に綺麗な子が増えるためその勢いの度合いはもの凄か
つた。

「えつと近藤はどうこの席がいいかね……そういうえば田村、お前の席
の横空いていたよな？そこを席にしようつか……いいか？近藤」

俺の席の方を担任が指をさしてそういうと近藤さんは軽く頷き承諾
をすると健一以外の男達からなぜか嫉妬や恨みをこめた目で睨まれ
ることになつた。

なんで俺が睨まれる羽田にあうんだ・・とそう思いながら下を向き
ながら深いため息をついた後、再度顔を上げると、

いつのまにか近藤さんが目の前におり、微笑みを浮かべていた。

「田村君よろしくお願ひしますね。」

近藤さんはじりじり俺が顔を上げるのを待つていたようで俺の方にちゃんと挨拶をした後

「あと近藤今日教科書あるか？ないのなら田村に見せて貰え、あと

学校の質問はすべて田村にきいてくれ」

とこう担任のなぜか責任逃れにも似た言葉が聞こえてきた。

近藤さんは担任の言葉に小さく頷くと指定された俺の隣の席に座った。

今後どうなるんだろうな～とあまりにも漠然的なことを思いつつ、それでも何事もなく過ごしたいなと呑気なことを考えていた。

だが、まだこのときの自分はまさかこの出来事をきっかけにあんなことになるとは夢にも思はずしなかった。

第一章 はじまり（後書き）

はじめまして元樹です。まだまだダメダメな点が多くありますけど
うか温かい目でみてください

第一章 友人

「ふあ～」

俺が朝のホールルームが終わって欠伸をして長く伸びをしていると、

「あの・・・」

「え？ なに？」

隣から声をかけられたので少しひくつをしながら体ごと声がして
いた方に向けると少し申し訳なさそうに顔をしてこっちに席に座つ
たまま顔を向けている近藤さんがいる。

（まあ今隣の席に座つているのは近藤さんしかいなければ）
と思い少し苦笑いを浮かべてしまつたが、近藤さんはそれに気づい
た様子もなく、

「申し訳ないだけど私教科書がまだ届いてないから良かつたら教科
書を見せてほしいんですけどいいですか？ 今日着たばかりだから田
村君以外には頼みづらいですからお願ひします。」

「そんなどよければいいよ。」

近藤さんに頭も下げられてしまつたので、俺は断れるはずもなかつ
た。

そういうと近藤さんは嬉しそうに笑い、

「ありがとうございます。じゃあ机をくつつけましょうか。
と近藤さんは自分の机を持ち上げ、俺の机の隣に付けた。

「あ、うんわかったよ」

俺はその様子を呆然としながら、机をくつつけられると遅れながら
もそう返事をしていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

キーンゴーンカンゴーン

「はあ・・・・やっと昼だ・・・・

俺は4限目の授業が終わるチャイムが鳴ると同時にだらけた。

「あの？大丈夫ですか？」

その様子を教科書見せるために机をくつづけている関係で近くにいる近藤さんが心配をさせていた。

「心配しなくても大丈夫だよ」

俺は心配させまいと顔を少しあげて、微笑んで見せてまだ少し近藤さんは心配そうな顔をしていたが、

「そいつは心配しなくとも大丈夫」

いきなり現れてそんな発言をしたのは健一で、

「近藤さん、そうだよ～ 真司はいつもそんな感じだからさ」

その健一の後ろから顔を出してそういうのは、葵だった。

「ひどいな・・いつもいつもそんな感じだとと思われちゃうじゃないか。」

俺はその一人が出現したもんだから急いで上半身を上げ、少し不機嫌気味にいつてみたが

「でも本当のこと」

健一に即座に否定をされ、その言われた事を言い返すこともできず、（否定することもできないのはむなし・・・・）

とか思うことしかできなかつた。その様子を少し傍観していた近藤さんは、

「皆さん、仲がよろしいんですね」

「まあ（ね）真（司）と友人やれるのわし（あたし）たちくらいしかいない（からね）」

近藤さんが微笑を浮かべながら目を細めていわれた健一と葵は最初に少し苦笑いを浮かべてから二人同時にうんうんとうなずきながら言つていた。そして言つてることが重なつた二人はそれにびっくりしてまた苦笑いをしていた。

その答えに満足したのか、近藤さんは少し楽しげに笑つていた。

近藤さんの様子を見ていた葵は、なにかを思い出したように視線を近藤さんから俺のほうに移して

「そういえば、真司にご飯のお誘いに来たんだよ～」

と「カツ」と笑つた笑顔を浮かべて言つた。

「もうよければ近藤さんも一緒に」飯食べないかな?あ嫌なら別に断つてもいいんだよ?」

俺はその言葉を聞きちょっととしたことを思い付いたのでそれを提案することにしたが最後にはなんか不安になつたので自分をフオローすることにした。

「私なんて入れてもらつてもいいのですか?」「うんいいのですよ~」

「大丈夫」

近藤さんが申し訳なさそうに言つと即座に答える一人を見てやつぱり俺の友人だと改めて思った。

「ありがとうございます。お言葉に甘えさせてもらいます。」

近藤さんは嬉しげに笑いながらそついた。

「じゃあ早く準備しないとね~時間がもつたいないから健一と真司あと二つ机と椅子持つてきて!」

「あいわかったよ

「わかった」

葵にこつき使われるのはいつものことなので俺たちはそういう俺の席の周りのところからお互いやセットずつ持つて葵の所まで向かつた。

「はいおかえり~」

「お一人ともお疲れ様です」

「ただいま帰りました」

「ただいま」

俺たちは定番(?)のあいさつを交わすとすぐ小学校で給食を食べるときみたいに机をつなげた。

「さて各自さつさと座ること!近藤さんあたしの隣ね~」

俺はそういうわれるといつものとおり健一が座つた席の隣に座り、葵は近藤さんを手招きして、近藤さんは戸惑いながらも葵の隣の席に座つた。

「ねえねえ近藤さん！早耶ちゃんと読んでもいい？」

「はい、いいですよ」

「じゃあ早耶ちゃんね！あたしは西原葵だよ～だから葵でいいからね」

「それでは葵さんとお呼びしますね」

近藤さんが弁当を出して開けようとしている時にいきなり隣の葵にそんなお願ひをされてびっくりしたようだがすぐ冷静を取り戻し、嬉しそうに会話をしていた。

俺はその様子を横目に見ながらかばんから朝昼兼用となつたパンを出して袋の口を切つた。

「わしは相良健一。健一と呼べばいい」

「はいわかりました。健一さんとお呼びします。あの田村君はなんとお呼びしたらよろしいですか？」

「え？俺？じゃあ下が真司だから真でも真司でも何とも呼んでいいよ」

おれはいきなり話を振られたもんだからかなりびっくりしながらもなんとか会話をする事ができた。

「それではそうですね・・・真司さんとお呼びする」とこします。それで健一君と蓮君は私のことを早耶とお呼びしてもらつて結構ですから」

「じゃああたし達が早耶ちゃんのこの学校で初めての友達とこつひとつで！」

「そうだな」

「真司もそれでいいよね？」

「え？ そうだね。もう早耶さんの友達だよ」

早耶さんに下で呼ばれたことになぜか凄く懐かしさを感じていたが葵にそう声をかけられたもんだから急いで返事を返した。

「みなさんありがとうございます。改めてよろしくお願ひします」

「早耶ちゃんよろしくね～」

「よろしく」

「うん、じちりじちりじよるじく」

みんな笑顔でそう言いあつていた。

俺がなにげなく教室にかけてある時計に目を向けたのだが・・・

「あ・・つてもう毎休みがもう半分くらい過ぎているじゃないか!?

「え? そつなー? もう食べなちゃー。ほら早耶ぢやん早く食べよ」

「そうですね。食べましょうか」

「そうだな」

俺が時間をかなりすぎでじることに気づきその事をいつとみんないそいそと手を止めていた食事を再開し始めた。

「それにも真司の『ご飯なんかとても貧相だね~ちゃんともっと食べなつちゃいけないよ~』

「これで十分なんだよ。あと準備する時間もないし

「真が朝ざりきりまで寝ているから時間が無い」

「いいんだよ。俺は食事より睡眠の方が大事だから」

俺はそう言いつけると今食べているパンを残っている部分を全ていつきに口の中に放りこみ自分が使つてゐる机においてあつた紙パックの「コーヒー牛乳を取り、流し込んだ

「ゴクゴク。ふぅ~終わり!」

「そのようにいつきにお食べしたら体に悪いですよ」

早耶さんは食べてゐる最中の箸を止めてそう注意をしてきた。

「早耶さん心配しなくても大丈夫だよ。」

「ですけどなるべくしないでください」

「ん~分かつたよ。今日初めて会つたばかりなのに心配してくれてありがとうね」

「そんなの関係ないです。学校きて始めての友達なのですから
そう言つと少し照れ笑いを浮かべて、止めた箸を動かし始めた。

キーンコーン カーンコーン

俺たちはその後も食事を食べながらもしゃべつていてチャイムの音が鳴り響いた。

「そういえばすっかりりずっと話していたね」

「そうだね」

「早く机を元に戻しましょう。」

「それがいい」

「真司さんありがとうございます」

「ん? なにが?」

「少し短すぎましたね。昼を誘つて頂き本当にありがとうございました。あとお友達なつていただき本当にありがとうございます」

「そうしたかつたからしたんだからいいんだよ。こちらこそ友人になつてくれてありがとうございます」

そういうと早耶さん照れ笑いを浮かべていた。

（それにも早耶さん本当にきれいだな）

「もう授業だから静かにしてください。」

すこしそんな事を考えているといつのまにから限目の先生が入ってきていた。

「真司さん午後もよろしくお願ひしますね」

「うんもちろんだよ」

その会話をして俺は黒板の方に顔」と向けた。

・・・・・・・・

「今日はやつと終わつた・・・」

「お疲れ様です」

俺は帰りのホームルームが終わると同時にへばると早耶さんから労いの言葉を貰つた。

「そこ! 昼みたいにへばらない!」

「お前駄目すぎ」

「昼と同じで一人酷いな・・」

友人一人は昼と同じように俺に対して酷い発言しながら出現をした。

「なあ、友達に労りの心を持つという気持ちがない?」

「まつたくない(よ?)」

「悲しくなるからハモらなくてもいいから・・
俺はため息をつきながらおもわず頭を抱えた。
」

第二章 友人（後書き）

ああ・・・まだ一日が終わりませんね
見直しが不十分な点ありますのでなにか気づいたら終えてください

第三章 素因気（前書き）

更新遅くなりすこませんでした

第三章 霧雨氣

「馬鹿やつてないで早く帰れ!」

「苦しい・・・ちゃんと行くから離して・・・」

「じゃあちゃんと追いついてくるんだよ!」

俺が頭を抱えたらすぐに葵が俺の服の襟を掴んで動かそうとしたため、それがもろに入り苦しそうに返事したがそれを気にした様子無くすぐ離して教室を出て行つた。

「わしもついて行く」

「じゃあ早く行こ」

葵に着いて行く感じで健一がついて行き、葵は返事だけして後ろを振り返らず教室出て行つた。

「真司さん大丈夫ですか?」

「心配してくれるの君だけなんだね・・・」

「真司さんどうしたんですか?なんか涙流しています」

「う、ううんなんにもないよ」

俺が感動の涙を流していたら心配されてしまい、慌てて否定した。それでも早耶さんは心配なのか、「本當ですか?」といつて顔を近くに寄られて覗き込まれ、かなり緊張して一時じ~っと見てしまつた。

「え、あ、だ、大丈夫だよ」

「本当に大丈夫ですか?」

「本当に大丈夫だよ。だから早く行こう葵達たぶん下駄箱で待つているし」

「本当にえ、分かりましたから、だから押さなくともいいですよ。」
いきなり覗き込まれたからかなり慌ててしまい、かなりうわずった返事になつたので早耶さんは、やっぱり心配そうな顔をしていたが不自然だが話を変えてまた聞き返そうとしたのを無理矢理回れ右させ、背中を押して話しを終わらせた。

「無理矢理押さなくても良かつたじゃないですか・・・」

「『ごめんね。だから機嫌なおして欲しいよ』

無理矢理話しを終わらせるように背中を押したのがいけなかつたのか教室を出る時には少し怒つたようで、そのまま歩き始めたので俺も追いつき、その横に並んだ。

彼女の顔をちらつと見たのだが、

（怒つているようだけどまったく怖く感じないのが不思議だな）

「なにがおかしいですか？」

「いやいやまつたく可笑しくないよ。本当に『ごめんね』

俺自身が気づかぬうちに少し笑顔を浮かべていたのか、突つ込まれてしまつた。

だがまあ謝つても顔が緩んでしまつて自分自身をえこの状態じゃ謝つていっても説得力ないのは、まるわかりだ。

もうその俺の様子見て諦めたのか、「もういいです」と少しため息まじりで言われたが早耶さんの顔は笑顔を浮かべていた。
もう怒つてないのを確認したので、昼の時に思つた疑問をぶつけることにした。

「早耶さん昔会つた事あるかな？」

「え・・・」

俺はすぐに会つた事ないと答えると思つていた予想と違い、早耶さんは表情が固まつた。

「どうしたの？」

「あ心配しなくても大丈夫ですよ、それよりも会つたことないですね」

俺が聞き返すとその表情は戻り、一瞬だけ寂しそうな顔をしてからすぐ笑顔を浮かべた。

俺はそれを見てこれ以上聞き返す事を憚られたため、「そつか」と言つた後すぐに話題を変えて話を続けていった。

その後は、早耶さんと下駄箱に着くまでたわいもない話しを続けていき、その中にはさつきのような事は起きなかつた。

「遅いよ～早く来てつていったのに…」

「葵遅れてごめん！」

「まあ許してあげる～」

俺たちが下駄箱に着くと葵が健一の横で不満そうな顔を浮かべていたので瞬時に謝つたため葵はすぐに許してくれた。

「そういえば真司と早耶ちゃんだいぶ仲良くなつたみたいだね～」

「そうか？まあ少し話しながら来たからほんの少しほんの少しあは仲良くなつたかもな」

「そうかもしれませんね」

「でも不思議だな～今日初めて会つたはずなのに真司と早耶ちゃんの場合なんか自然な感じもしていたかも」

「確かにそうだ」

健一の言葉に葵と健一の二人は何回も頷いていた。

俺はさつき葵から言われた言葉にかなり不思議な感じを感じて（そんな自然といわれるほどの雰囲気出していた氣しないんだが…・でも否定もなぜかできない・・・）つといろいろと考えを巡らせていていた。

「みなさんここで止まらず、早く行きましょう」

「そうね～じゃあ帰ろうか！一人も帰ろう！」

「ああ分かったよ」

「了解」

その考えを巡らせている最中に突然横で声がしてビックリしたため横を見ると早耶さんが帰ろうっと少し大きめな声で言っていたことに気づき、すぐに葵に同意求められたためちょっと不自然な返事になつた。

靴を履き、話しをしながら四人で校門を通り過ぎようとする辺ところで葵が何かを気づいたのか早耶さんを黙つて覗き込み、そのまま話しを再開した。

「そういえば早耶ちゃんは家どこへ？」

「私ですか？」この通学路の坂を下つた所の途中ですね

「じゃあ一応途中までは私たちと一緒に帰れるね」

その事実が嬉しいのか覗き込んでいた顔を前に向け、葵は嬉しそうに笑顔を浮かべており、早耶さんも嬉しいのか、同じように笑顔を浮かべていた。

それからも嬉しそうな顔を浮かべながら一人は話しを続けている。おれたちというと健一は葵の隣でその様子を眺めており、俺は早耶さんの隣でその様子を横目でみながら、天気がいい空を眺めていることにした。

葵達女性は俺たちに挟まれて守られている感じで歩いていた。

「私この道に入らないといけないですから」

「そつかまたね」

分かれ道に入るようで早耶さんは前に出て自分が入る道に指を指した。

俺はそのまま手を振っていたのだが。

「ねえ！今水曜だからまだ早いけど早耶ちゃんが来た歓迎会を二人でしたいから今度の日曜日あけといてくれないかな？」

「え、聞いていいぞ？」

「わしもだ」

「もう決定事項だからなにも言わない！」

「という訳でいいかな？」

「大丈夫ですけど健一さんと真司さんのことはいいんですか？」

「大丈夫よね？」

いきなり葵が大声で呼びかけたのもビックリしたが歓迎会をするなど言い始めてそれ以上にビックリしたのだが後ろ振り返った時の顔は「無理とはいわないよね」という事を物語っているため俺たちは、「はい」という返事しかできなかつた。

（まあ全く反対しないんだがいきなり決められるのは困った物だ）
（と思いつつ小さくため息をついた。

「そういうことだから空けておいてね！」

「はい分かりました。みなさま、また明日会いましょう」

「ああまたね！」

「早耶ちゃんまたね～」

「また」

早耶さんが会釈をすると俺たちは笑顔で手をふった、そして道に入り、見えなくなつてからまた帰り道を歩き始めた。

歩き始めてすぐ葵は少し暗そうな顔になつて顔を下に向けた。

「ちゃんとした友達になれるといいな・・・」

「なれるさ・・・」

「あたし達のある事情知つたら田の前を去つてしまいそうで怖いな・・・」

「きつと大丈夫さ！」

「大丈夫」

「ありがとう・・・」

俺たちの言葉に葵は救われたのか、顔を上げ、微笑みを浮かべた。だがそれでもやっぱり少し不安なのか、ちょっと無理して微笑みを浮かべているように思えた。

その後葵は無理してテンションをあげたように、俺たちそれぞれが別れる道までずっとしゃべり続けており、俺がつっこみやいろいろ合いの手をいれ、健一は頷きながら話を聞いていた。

葵達と別れて自分の自宅に帰宅し自分の部屋に入つてから制服も着替えずベットの上に座つてずっといろいろな事を思い返したり考えたりを繰り返すばかりだった。

第三章 雰囲気（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。
これからは更新スピードあがるように努力します。
小説の人物達にも夢で怒られましたしw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5065c/>

桜草

2010年10月10日14時48分発行